

季刊

湘南自然誌

Vol.40

March 12th 2026

神奈川・湘南
地域の自然を
再発見する

特集

地球が食卓に並ぶまで

地元の土を活用した
自然 / 陶芸 体験記



丹沢山地の土（神奈川県山北町）

園児と自然に
触れ合う中から生まれた
四季のコラム

園児や地域の皆さんからの
投稿写真を季節毎に掲載
**湘南発 みんなでつくる！
生きものの図鑑**

自然からのメッセージを子どもたちへ
平岡の自然教育の今

県立愛川ふれあいの村
吉田文雄学芸員によるコラム
心が育つ幼児教育

遊んで学ぶ生きもの
知育ゲーム

四季のコラム 冬(1)

本誌発行元の平岡幼稚園の園便りに掲載したコラムを一部改編してお届けします。

文／堀田佳之介（平岡幼稚園園長）

身近にできる

冬の鳥の観察



冬季戸外に穀物や果物を置いておくと、スズメ、シジュウカラ、ムクドリ、ヒヨドリなど身近に棲む鳥を呼び込むことができます。お薦めは、ヒマワリの種を用いたシジュウカラの観察です。趾（あしゆび）でヒマワリの種を押さえながら、器用に嘴（くちばし）で殻を割り中身を食べる姿は、見ていて感心させられます。さらには、仲間との意思伝達に、チチチ（集まれ）、ピーツピ（警戒）などと言葉を操るというから驚きです。住宅街でもよく見られる鳥なので、ぜひ観察してみてください。

天気の良い日は、河川の土手で鳥の観察をするのもお薦めです。先日ふらっと近くの土手を散策したところ、キョロキョロと餌となる小魚を探しながら浅瀬を歩くコサギに出会いました。狩りの成功率はそれほど高いわけではなかったのですが、魚を見つけるとすばやく嘴でつつく姿に、しばらくの間寒さを忘れて見入ってしまいました。

平塚市には海や川に加え、まとまった田園地帯や森などがあり、年間を通じて多様な鳥が見られます。鳥は、眺めたり写真を撮ったりするだけでも十分楽しいのですが、もう一步踏み込んで行動や鳴き声などに着目してみると、観察がもっと楽しくなると思います。

1・2 / 平岡幼稚園にあるバードテーブル。冬季は市販の鳥の餌などを入れて、いろいろな鳥を呼び込んでいる。

3～5 / 浅瀬を歩きながら餌を探すコサギ。子魚の姿を見つけると、サッと動いて嘴（くちばし）で器用に捕らえる。

東京ディズニーリゾートより

日本人の自然に親しむ文化



先日、プライベートで十年ぶり?くらいに東京ディズニーシーへ行ってきました。この場所は、様々な植物が植栽されているものの、ほとんど生きものの姿を見かけることがないイメージがあったのですが、今回いくつか発見があったので少し紹介します。

1つ目はホシハジロ。冬になるとシベリア方面からやってくる水鳥です。アメリカの小さな漁村を模した海岸（ケープゴット）で多くの個体が越冬していました。水面一帯に広がる群れは圧巻で、時折雪がちらつくような寒い日でしたが、立ち止まって観察している人も、よく見ると水に浮かびながら、頭を翼の間に入れるように丸まっています。このような姿は「浮寝鳥（うきねどり）」と呼ばれ、古来より冬の季語として親しまれてきました。寒さをこらえるように縮こまるたくさんのホシハジロ。その姿を眺めているうちに、私も冬の寒さが身に染みってくるようでした。

2つ目はファンタジースプリングス。夕方薄暗い中、多くの人が

行きかう植栽帯の中から鳥の鳴き声。一瞬、鳥がいる?と錯覚したのですが、どうやらスピーカーが仕込まれているようです。しばらく歩いていると、今度は「リーリーリー」とコオロギの仲間の声。虫を敬遠していると思っていたテーマパーク内で、癒しの演出として虫の音を使用しているとは驚きでした。昆虫に関心の薄い人が多いディズニーの本場米国では、このような演出はしないのでは?と思います。日本人ならではの感性と自然に親しむ文化の一片を、まさかこの場所で感じるとは思わず、ちょっと嬉しい気分になりました。

1 / 2024年に完成したファンタジースプリングス。精霊が住むという魔法の泉や、森を模した植栽帯が広がる。

2・3 / ケープゴットの海岸で多くの個体が見られたホシハジロ。そのほとんどが、じっと動かず水面に浮かんでいた。

四季のコラム 冬 (2)

本誌発行元の平岡幼稚園の園便りに掲載したコラムを一部改編してお届けします。

結果発表

全国学校・園庭ビオトープコンクール 2025



ご報告が遅くなりましたが、昨年末に（公財）日本生態系協会主催の「全国学校・園庭ビオトープコンクール 2025」の結果発表がありました。平岡幼稚園の取り組みは、最上位賞（大臣賞等）には届きませんでしたが、次点の「優秀賞」をいただくことができました。今回は全国より85校（園）の参加があったそうです。

2月8日（日）に東京国立博物館で発表大会が開催され、同館ラウンジでポスター発表をおこないました。“トンボ好き”で知られる秋篠宮さまの長男悠仁さまもいらっしゃるとのことで、美しいトンボ写真（園内で見られたマルタンヤンマ、カトリヤンマなど）を仕込んだポスターを作りました。貴賓の方々と直接お話しすることはできませんでしたが、もしかしたら、え!?園の中にこんなトンボが!と驚いてくれたかもしれません。大講堂では秋篠宮さまより「ビオトープは自然と触れ合う場にとどまらず、自然との共存について考える大切な場所。日本各地で普及し、自然を慈しむ

心の輪が広がってほしい」とのお話がありました。

当日会場では多くの学校と交流し、とても良い刺激をいただきました。本園のビオトープも、園児の豊かな学びの場になるよう、今後も地道に活動を続けていきたいと思っております。

1 / 雪の舞う中、東京国立博物館にておこなわれた全国学校・園庭ビオトープコンクール発表会。 2 / ポスター発表には多くの来場者が集まり、さまざまな情報交換が行われた。（一番手前が平岡幼稚園のポスター） 3 / 本園は優秀賞をいただくことができました。 4 / 発表会の会場となった平成館（東京国立博物館）。



Education
in nature

自然の中で豊かな心身を育む



湧き水や井戸水を利用した水辺、豊かな植生が見られる園内。ひとたび散策すれば、子どもたちはいろいろな発見をしていきます。色彩鮮やかな野の花、さまざまな匂いや質感の葉、甘酸っぱい果実、幻想的な羽化 etc・・・昨日見られたものが今日も同じとは限りません。自分の考えや予想に反することもことがあるでしょう。自然はいつだって同じではない、だから子どもたちは夢中になるのです。



平岡幼稚園

いのちとふれあう教育

平岡幼稚園は、住宅地や耕作地に囲まれながらも豊かな自然が残っています。野生生物の棲み処（ビオトープ）として管理することで、子どもたちがたくさんの「いのち」とふれあいながら、日々園生活を送っております。



〒259-1212
神奈川県平塚市岡崎3024
学校法人平岡学園 平岡幼稚園
TEL: 0463-58-1188



website

地球が食卓に 並ぶまで

地元の土を活用した
自然／陶芸 体験記



参加者の作品



矢島そのみさん

協力してくれた人

足柄上郡山北町生まれ。武蔵野美術大学油絵学科卒。東京都立中学校美術科教諭として36年間勤務。退職後、日本自然保護協会の自然観察指導員として、親子自然観察会などを仲間の支援を得ながら開催している。また、故郷の自然を大切にしたい！との想いを込めて、丹沢の山の土を使った陶芸にも取り組んでいる。

※粘土の採取については地権者の許諾を事前に得て
います。

「この崖は、大昔海底火山のマグマが地表付近で冷えて固まったものが露出しているものと思われ。この白っぽいところが粘土で、安山岩が風化したものです。」
火山の堆積物が長い年月をかけて変質し、中でもとりわけ細かい粒子となったものが粘土として利用できるのだ。

一通り説明が終わると、待つてましたとばかりに子どもたちはスコップを持って崖に駆け上がる。粘土層は意外に硬く、削るようにして土を掘り出し、各自器数個分をビニール袋に入れて山を下りた。

山中にはツキノワグマも生息するため、事前に矢島さんに安全確認をしていただいていたが、念のため熊鈴なども携え、午前10時頃出発する。矢島さんは日本自然保護協会の自然観察指導員でもある。山の動植物をゆっくり観察しながら林道を進み、40分ほどで目的地の小さな崖へ到着する。一見ただけでは粘土があるようには見えなかったが、よく見ると比較的颜色が薄い層があった。これが粘土のようだ。

特集



山で土を採取 ≫ 粘土を精製 ≫ 器づくり ≫ 食卓へ



土に出会い、地球の履歴に触れる

現代において私たちの生活は自然環境と切り離されてるように感じられる。しかし、実は身の回りの物すべては自然物が姿を変えたものだ。毎日手にするような日用品を通して、意識しづらい自然との繋がりを感ずることはできないだろうか？ そう考え、丹沢山地の粘土を使った陶芸に取り組む矢島そのみさんに協力をお願いし、園児家庭とともに丹沢の山に登り、自分の手で土を掘り出すところから器づくりを体験してみることにした。

自然との繋がりをこの手で感じたい

生きものに触れることだけが自然体験ではない。山に登って土を採り、器を作って生活を共にすることで、自然と繋がる楽しさを味わってみた。



1

12月23日の朝、私たちは、神奈川県では珍しく陶芸に使える粘土が採れるという丹沢山地のある山に集合した。まずは矢島さんから、丹沢山地の成り立ちについて簡単なレクチャーを受ける。およ



自然を感じる陶芸体験

〜自分で粘土を作り、器を作る〜

粘土を抱えて山を下り、矢島さんの工房へ到着した頃にはお昼を過ぎていた。山より持ち帰った粘土がそのまま陶芸に使える訳ではない。本来は何日もかけて精製していくが、今回は短時間で使える状態にしないと器の制作時間が取れない。そのため、矢島さんから教えていただいた簡易的な粘土の精製法を進めていく。

「まずはこの土を石で叩いて、細かくなったら水を入れてドロドロに溶かしましょう!」

皆初めて経験する作業で、加減が分からず四苦八苦する場面も見られたが、子どもたちは泥んこ遊びのように土と触れ合うこと自体を楽しんでいた。あの崖で掘ってきたボソボソとした粘土が、こうして徐々に「使える粘土」に変わっていく。

「この粘土は形を作るのが初心者には少し難しいので、市販の粘土(滋賀県産の信楽粘土)を半分くらい混ぜてみよう。」

この工程が終わると、矢島さんより「手ろくろ」という回転する台を使った器づくりの指導が始まる。市販の粘土を混ぜたものの、粘りが少なくなやや扱いが難しいため、お皿などシンプルな形のものを作ることを推奨された。それでも子どもたちは意外にも上手く形作り、器に虫の絵を彫る子や、取っ手の付いたカップに挑戦する子もいた。

みな夢中になって時間ギリギリまで制作に没頭していたが、今回の企画は、いい器を作るといふより、土の変化を通じて自然を楽しむことが主眼である。器づくりはこのくらいで終え、以降の器を焼く工程は矢島さんに託した。

山登りから はじめる陶芸

STEP 01. 丹沢の山で土を採る

霜が残る丹沢山中、鹿の骨や哺乳類の糞、木の実や冬芽などを観察しながら歩く。目的地に到着すると、粘土とそうではない土の層を見分けながら、スコップで掘り出した。普通の土よりはヌルとした手触りがあったが、粘度はそれほど高くはなく、ボソボソとしている。



STEP 02.

粘土を精製する

まずは、かたまりになっていた土を石でくんで細かくする。それを水に溶いてざるに通し、不純物と大きな砂粒を取り除く。どろどろになった土は、珪藻土マットや石膏板に広げ、成形できるくらいまで水分を減らす。粘りを増すために陶芸用の信楽粘土を少し混ぜたら下準備完了だ。

STEP 03. 好きな器を形づくる

手ろくろという道具を使い、指先の感覚を駆使して微妙な力加減で形を作っていく。ひも状にした粘土を積み上げてカップにするという本格的な手法に挑戦したり、スタンプでデコレーションしたりするなど、それぞれが思い思いに器づくりに取り組む。最後に自分のマークを入れて完成だ。



3

器を作ってから約三週間後、矢島さんから焼き上がりの報告があり、編集部でまとめて受け取りに行く。粘土は乾燥や焼成により大きく収縮するため、割れてしまう危険と隣り合わせだ。私たちが作った器も一部ひびが入ってしまったものがあったが、ほとんどの作品を無事に焼き上げてくださった。

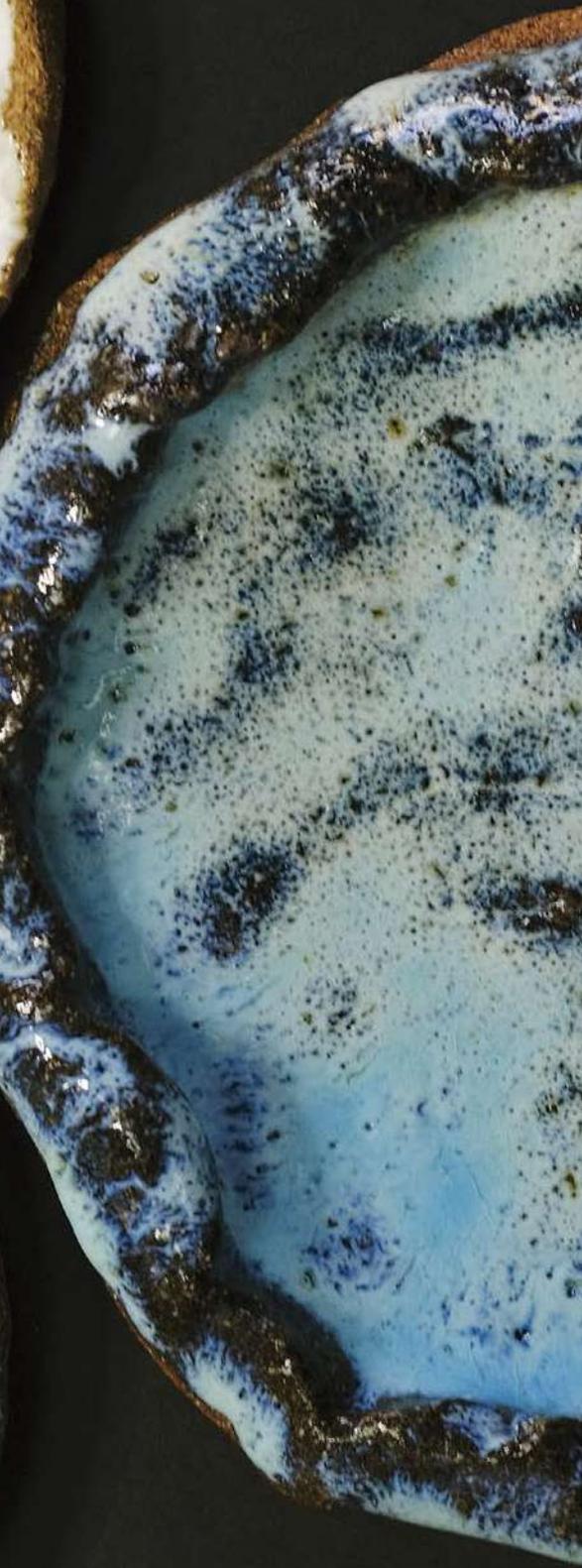
各家庭に引き渡す前に、まず子どもたちに器を披露してみた。すると、作った時との変化が大きいためか、はじめは本当に自分が作ったものなのか実感が湧かないようだった。しかし、自分で描いた名前や模様があるのを見ると、作った時の記憶がよみがえったようで、皆自分の作品を手にとって、「コーラを入れて飲みたい」「パンを乗せてみたい！」などの声があがる。また、釉薬が醸し出す複雑な色の変化に気付いて器に見入る子も見られた。

器が焼き上がり、いよいよ手元に

特集

地球が食卓に 並ぶまで

地元の土を活用した自然／陶芸 体験記



山の土が千二百度の世界を潜り抜ける

作った器は焼成して完成となる。まずは乾燥のために一週間おき、次に 800 度で素焼きし、釉薬をかけてから、1230 度で本焼きする。そのため、完成までには三週間以上かかる。

1230 度という温度はマグマとほぼ同じ温度である。火山の噴出物が長大な時を経て粘土となり、再びマグマに還り、焼結する。陶芸は火山活動を再現しているようなものなのだと考えよう。



1



2



3

1 / 土の耐火度が低く、本焼きの際にドロドロに溶けてしまった器。丹沢の別の場所で採取した粘土で矢島さんが作ったものだそうで、土の組成によってはこういうことも起こる。 2 / 素焼きの後に釉薬をかけられて、本焼きを待つ作品。 3 / みんなの作品を眺めて楽しむ園児。山の土の変貌ぶりは、まさに不思議そのものである。

美しく変化した作品

作品を彩るガラス質の釉薬は、土との相性、焼く時の酸素量などによって発色が変わる。眺めているだけでも美しい出来栄となった。

特集 地球が食卓に並ぶまで

地元の土を活用した自然／陶芸 体験記



1



2



4



3



5



6

丹沢の土

土味豊かな数々の作品

1・2 / 白い釉薬がかかったカップ。噴き出す斑点や無数のピンホールが味になっている。 3 / 釉薬の合間から荒々しい土肌が覗く、抹茶碗のような小鉢。 4 / 土の鉄分に反応して青みがる釉薬。釉が溜まりクワガタの絵が浮き出す。 5 / 写真③の作品の裏面。白っぽい信楽の粘土と、赤っぽい丹沢の粘土が混ざり切っていないのが面白い。 6・7・8 / 作為のないゆがみが味となる小皿。 9 / 樹木の灰を利用した自然味あふれる釉薬がかかったミニ植木鉢。



7



8



9

山に登り、崖の土を掘り出し、自分の手でこねて粘土にし、器を作る。そしてそれが食卓に上り、暮らしを彩る。矢島さんの導きによって、得がたい経験をすることができた。自然の楽しみ方は色々ある。完成しか知らない私たちに、地球との繋がりを体感させてくれる貴重な陶芸体験＝自然体験となった。

END

さいごに

子どもは泥遊びなど、五感を使って素材と戯れるような遊びが好きだ。これは子どもだけでなく大人にも言えるのかもしれない。今回のイベントでは大人たちも泥だらけになって、時間を忘れて没頭していた。私たちは、大人になっても心のどこかで、自然と繋がる楽しさや心地よさを求めているのかもしれない。

山に登り、崖の土を掘り出し、自分の手でこねて粘土にし、器を作る。そしてそれが食卓に上り、暮らしを彩る。矢島さんの導きによって、得がたい経験をすることができた。自然の楽しみ方は色々ある。完成しか知らない私たちに、地球との繋がりを体感させてくれる貴重な陶芸体験＝自然体験となった。

地割れのようなひび、均一に混ざっていない土、不純物の吹き出し、そして左右対称でない造形……これらの荒々しい土味を残した器に、陶芸家の作った抹茶碗のような趣まで感じられる。

四苦八苦しながら作った器で食事をする子どもたちは、みなニコニコの笑顔だ。分厚くて重く、ひびが入っている器は、決して使いやすくないはず。しかし、自ら崖を駆け上って掘り出した土から生まれた器への愛着は、格別なものだろう。



が器となり



素材感あふれる器たち

4



食卓に並ぶ



山の土の温もりが生活と自然を繋げる

器は作って終わりではない。使ってこそ生きてくるものだ。山の土の温もりであふれるこれらの器が、私たちの生活と自然を繋ぎ、心に彩りと潤いを与えてくれる。自然と共存することの楽しさと大切さを、子どもたちの笑顔が物語っているかのようだ。